



商談成立

R18

CAHLACAHLA

時は大海賊時代

ひとつなぎの**大秘宝**を目指して、麦わらの一味は航海を続けていた！

順調に帆を進めていたかのように思えたが

一行の財政を担う航海士ナミはある不安を抱えていた



どんな島でも見つけければ上陸し、大事がなくなるとも派手な宴を催す一行
そして航海中の食費…

キャプテンの自由奔放な振る舞いが、財政を圧迫していった…



このままでは航海に影響すると事を重く見た航海士ナミだったが
一味の豪遊は止まらない…

そんな中…
一行がとある港町に立ち寄った際

ナミにあるビジネスが持ちかけられたのであった



取引の相手は海賊だった
先日から一行が滞在しているこの港町を拠点に
活動している海賊らしい

海賊の欲しがったものはナミの身体…
馬鹿げた要求を鼻であしらおうとしたナミだったが…



100万ペリーをナミの身体に支払うと
言うのだからたまらない

「これなら…暫く食費の心配はなさそうね」

パフッ

パフッ

ハア

ハア

「しようがないわね…アイツらのために私が
一肌脱いであげるわ」

ナミは海賊の話に乗ってしまった…

パフッ

パフッ

ハア

ハア

攻め込もうとする海賊、どういう攻め手でくるのか探ろうと
しているナミ………両者の押し殺した吐息が部屋の温度を
上昇させていた

男の慰め方は心得ていた
海賊専門の泥棒としてナミはそれなりに
揉まれてきた

チンピラ海賊の欲望など
早急に処理するつもりだったのだが！

クチュ...

クチュ...



一人遊びもご無沙汰だったためか
ナミの反応は悪くなかった！

クチュ...

クチュ...

クチュ

クチュ

ナミはビズネスと割り切ってその卑しい感情を
抑えつけようとした



ハ
ハ
ハ
海賊のペースで事は運ばれていった

リッ……

ゼクッ

ゼクッ

無遠慮に触れてくるその手に回を挟める雰囲気ではなかった
さらに海賊はナミを責め続けた



アーロンの下で、金と欲にさんざん痛めつけられてきたナミは
海賊はもちろんのこと、世界政府関係者との肉体関係も多数
経験してきたのだが………
リッ………

「はう……!!!」

女のどこをどう押せば操れるか知り尽くしているような
世慣れた男は始めての体験であった

ゼクツ

さらなる快楽を得ようと、無意識に右の胸をほぐしていた
自身に気付いたナミは、この状況を打開しようとした

主導権を取り返さないと商談は不成立
ノリと勢いで二発、三発とただ働きするハメになる
ということを経験上知っていたからである



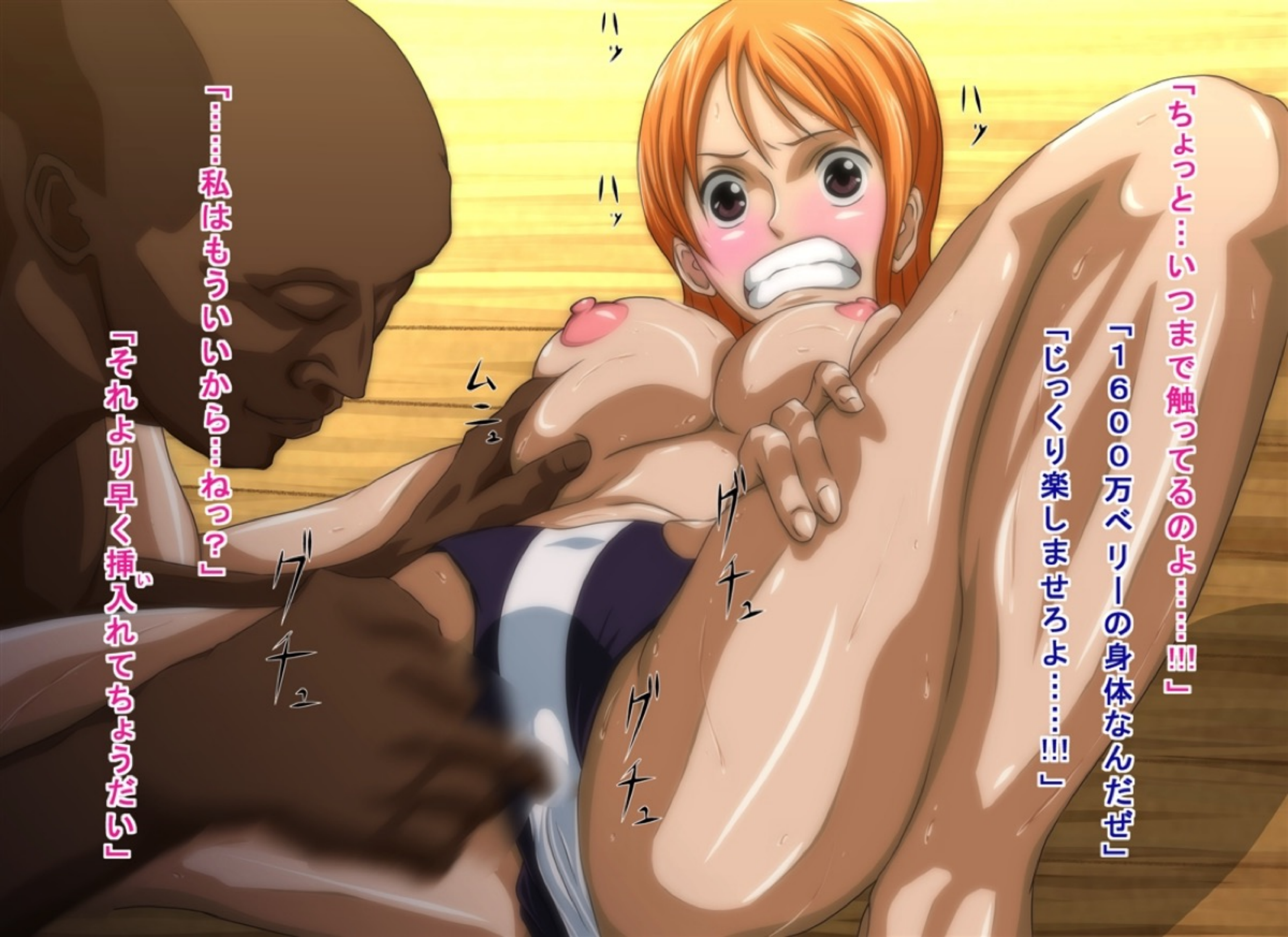
「ちよつと…いつまで触ってるのよ…!!!」

「1600万ベリーの身体なんだぜ」

「じっくり楽しませろよ…!!!」

「……私はもういいから…ねっ?」

「それより早く挿入入れてちようだい」



絶頂に導かれまいと耐えるナミは海賊に
本番を提案した



初対面のしかも海賊とときた、イカされることほど
ナミにとって、屈辱的なこととはなかったからだ

「おいっ!! 余計なモン付けるんじゃないわよ!!」

「生でやらせてあげるなんて…私言っていないわよ?」

「くそっ…」の女……」

「追加ベリ―次第で……外さないこともないわよっ?」



さきほどのお返しとばかりに、ナミは追加サービス料を
海賊に迫った……生の挿入に抵抗はないが、ゴムを付ける
ことによってもう一つ商売ができる

悶々とした空気の中、盛り上がっていた海賊は
渋谷ナミに従うのだった



「私のは…そ…このいらの小娘とは違うのよ」

「うおっ…なんつう締めまり具合だ…!!!」

ギョ

と
「おい…はやいと」腰振ってくれよ!!!」
「わかってるわ…焦らないでよ」

グッ
グッ
グッ
グッ

「どう……？気持ちいいでしょ」

「ほらほらっ!!!」

「お……お……お……っ……!!!」

ん

ズブッ!!

ズブッ!!

グチュ

グチュ

ー

と

「お……おい……待て……待って……くれ」

「ダメよ!!!」

「私はイク気ないんだから……一人でイキなさい!!!」



「ぐがあ……!!! てめえ……!!!」

「あら〜早いからねえアンタ」



「ち……ちくしょう……!!!」

「中出しできたんだから…文句ないでしょ？」

「それとも……もう一発イク？」

ビュッ!!

ビュッ!!

ビュッ!!

妊娠のリスクと引き換えに、中出し料も手に入れたナミ
だった。が妊娠の心配があったなら、こんな肉労の誘いなど
受けるはずがなかった



絞り取れるだけ絞り取ることにしたナミと
妙に羽振りのいい海賊の両者は、二回戦に突入して
いくのだったが……

「調子に乗りやがって…アーロンのメス猫が…っ!!!」

「…な…なんですって…!!!はう!!!」

「オラッ!!しっかりケツ突き出せよ!!!」

「ああ…いやっ……」

「入るぜえ…ナミさんよ」

「ああ…っ!!!何でアンタがアーロンを…っ!!!」

「うるせえな…おお!! 良いケツだぜ!!!」

「あっ…あう…!!! は…話を…!!!」

パン

パン

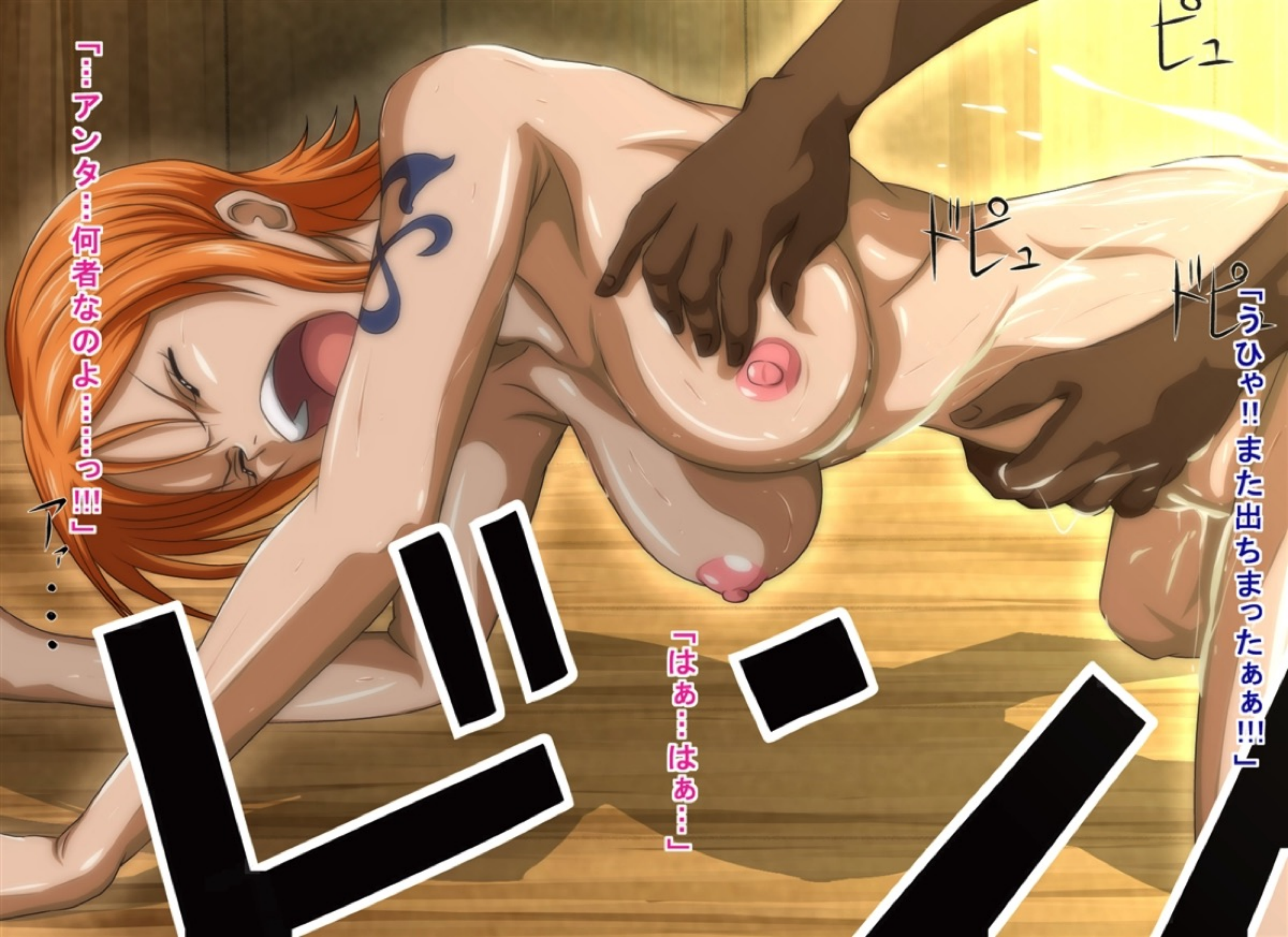
ガニ

ガニ

「たまんねえ…このクソ女…!!!」

「ちよっと…抜いて…ああっ!!! イ…っ!!!」





「…アンタ…何者なのよ…っ!!!」

「うひゃ!! また出ちまったああ!!!」

「はあ…はあ…」

[Redacted speech bubble]

[Redacted speech bubble]

[Redacted speech bubble]

ピュ

ドピ

ドピ

ヨコヤシ村の住人を人質にナミを道具のように使役して
いたアーロンはルライたちによって滅ぼされたはずだったが
アーロンの蓄えていた金の行方は不明のままだった…

ドピュ

アーロンは世界中の海賊を手懐けるために資金提供を
していたらしい…彼らはアーロンの動く金庫のようなもので
自身の蓄えを分散できる上でも都合が良いものだった

アーロンの金に引き寄せられ、がんじがらめにされた
海賊たちだったがアーロンが失脚した今…提供されたベリー
は返す必要もなく海賊たちの自由になっていた

話を聞いて苛立ったナミは、早々に行為を切り上げようと
したのだが……



「なにして……っ!!!やめなさいよ!!!」

「払うもの払って……とっつとど帰って!!!」

「三回分払うからよ……てめえのペリリーでなっ……ひひひ」

「……アンタ……許さない……っ!!!」



「クツ……っ!!! ああ……あっ……」

「いいカモだと思ったか……へへ……バカ女が……うっ……!!!」

「は……早く……その汚いモノ抜きなさいよ……っ!!!」

「おう……望み通り……ぬ……抜いてやるぜ……うおお……!!!」



「はう……ちよつと!!!」

「おっおっ……す……すげえ……ひひひ」

ドキュ

「こんなこと……なんでよ……」

「そっついう星の下に生まれてんだよデメエはっ!!!ひひひ」



アーロンから解き放たれてはいなかった……
海賊の精液を浴びながら、ナミは再びアーロンと戦うことを
決意するのだった

トピュ

適切な理由を口実に、ナミはこの地の長期滞在を船員たちに
求めた……快く受け入れてくれた仲間たちのためにもナミは
一人でアーロンとの腐れ縁を絶たなければならなかった……



翌日：ナミは二人の男と行為に及んでいた
酒場で声を掛けた海賊二人をこの安宿へ誘い込んだのだった

チンピラ海賊の身分で買えるほどナミは安い女ではなかった
ナミの提示する金額に納得したということは、この男たちも
アーロンの恩恵にあずかった海賊なのであった



「ナ…ナミちゃんよ…そういうに脇見せてやってくれや…」

パ…パ…パ…

「……〜(´・`・´)」

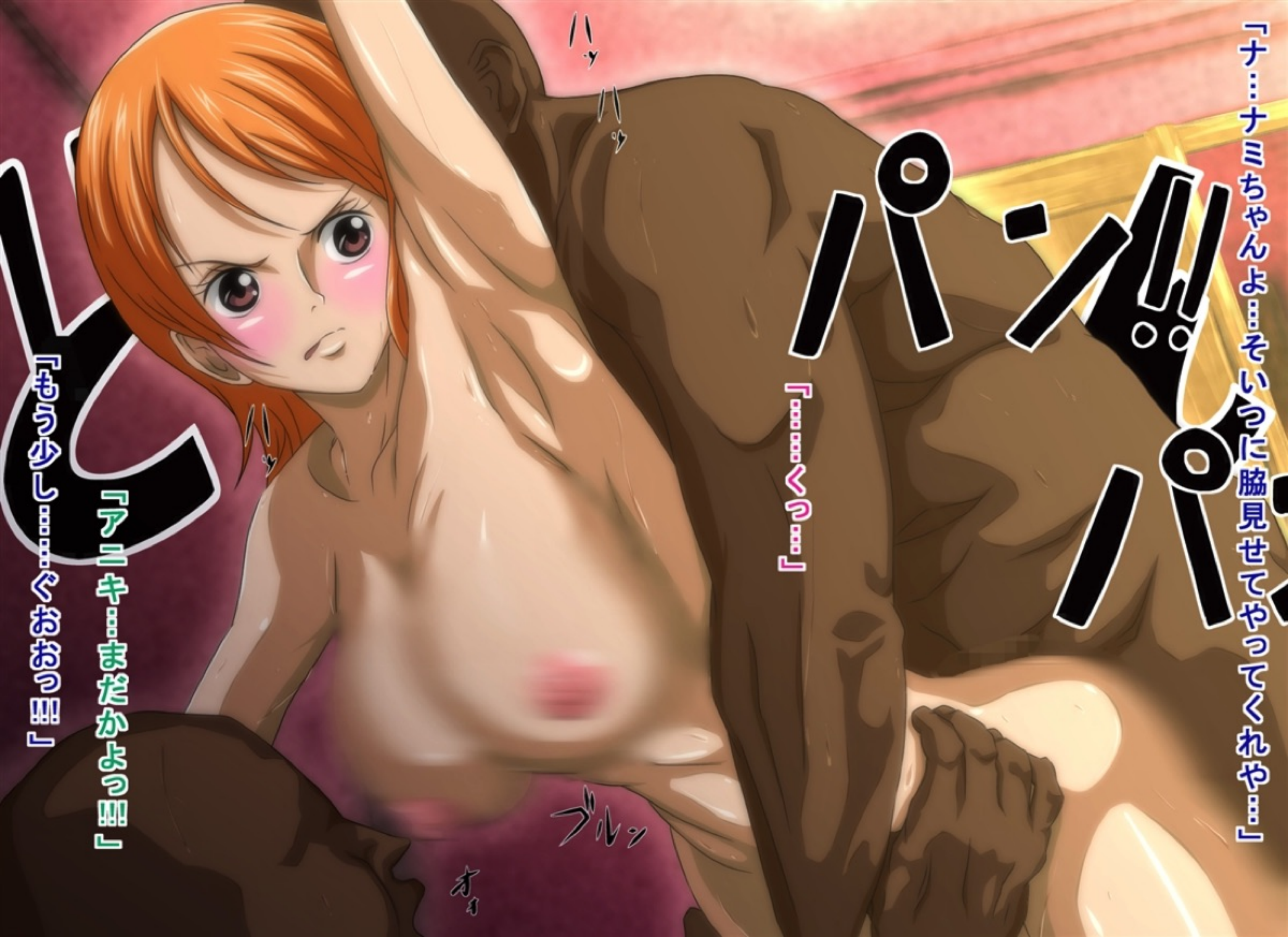
ハッ

ブルン

オィ

「もっ少〜……ぐおおっ!!!」

「アニキ…まだかよっ!!!」



「ぐはあ…っ…あ…っあ…っあ…っすげえ…」

「どけよ!!!早く!!!もうたまんねえよっ」

てゅるる

てゅ

「……射精だしたらさっさと出てってよね…」
「見物料10万ベリー取るわよ」



払いの悪い海賊にはサービスの欠片もない鉄の女になった
胸すらさらけ出すことなく淡々と作業的に射精させていった……

ナミの肉体に触れようとする者もいたが、ナミが麦わらの一味だと知ると
出した手を引っ込め耐えるしかなかった……



「なあ…おっぱい揉むだけでいいから…なるっ?」

「だゝめよ!!! 私をなめるんじゃないわよ」

「クソ…!!! こんな時に限って手持ちが…ああ…イク!!!」



「あうっ…がっ…!!! あっあっ!!!」

「はい終わり終わり…帰ってちようだい」

「おい…お掃除くらいしてくれよ」
「いやっ!!! 自分で拭きなさい」

ゼク

ゼク

ゼク

ゼク

アーロンとつるんで甘い汁を吸っていた先の海賊団の船員を
狙ってナミは次々と男の欲望を搾り取っていった……

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

ナミたちが命がけで稼いできたペリーを、己が欲のために
使い続ける海賊たち……



アーロンと重なる海賊たちからみんなのベリーを
取り戻す……ひいてはそれがベルメールへの償いとなり
アーロンの呪縛から解放されるような気がしたのだった……

企てがバレてしまわないように、ベリー次第で態度を変える
抜け目のない女をナミは演じ続けた……



「ああっ!!! ナミちち…ナミちちやああん!!!」

「あつらゝ溜まってたのね」

「最高……っ」

「私はお金持ちには優しいのよっ」

グ
ゼ
ユ

「な…ナミちゃん…もう一回…おっぱいで…っ」

「いいわよ…100万ベリー追加ねっ」

アーロンの金で成り上がった海賊たちが容赦なくナミを突いていった

オ

十

個人的な感情を抑えてきたナミだったが、次から次へと与えられる刺激に
その身体は快楽を覚え始めていた……



「あ……う……く……う……!!!」

オ

「ぶひひ……ど……どうだ……魔法使いちゃんよお」

「ま……まだなの……っ……は……早く……うっ!!!」



「はう…っ!!! 熱っ…!!!」

「へっ…まだ出やがる…と…止まらねえ」

「じの…っ…勝手に…中に…」



以前のナミであれば、仲間に見つかるとはなるリスクなど極力
とらないよう注意を払うのであったのだが……

ガッ

ガッ

スッ

スッ

彼女の判断力を鈍らせてしまう程、海賊たちはナミの
身体に悦楽を染み込ませていった……



「おいしいナミっつ!!! 飯食いにいくぞっ」

「つたくあの女…どこいきやがった」

「変ね…さっきまでこの辺りにいたのに」

ガメ

「のあみすあああん」

「ああオレ…腹へって死にそう…」

「おおいつみんな手分けして探そうぜ」
スニッ
スニッ

ガメ

「よし…スーパー任せとけ!!!」

「ナミさん見つけたらパンツ見せて頂けます? ロビンさん」

ガム

(ちよつと…やばいってば!!!)

ヒィ
ヒィ

(発情してるクセによお…げひひ)

ガム

(それは…身体が勝手に…)

ヒィ

パン

ガム

(だから嫌いじゃねえ…くっ…げひひ…イクぞっ!!!)

ヒィ



（バカっ!!!なんでも出すのよっ!!!）

（お…おめえが締め付けるから…だろ…げひ）

（チヨツパーが…嗅ぎつけちゃうじゃないの…っ）

ぐ

ぐ

ぐ

ぐ

金儲けを口実に新しい遊び方を試すこともあったが……
どれも肌に合わないものであった

ぽろぽろ

それでもマニアックなプレイに付き合ってくれるナミに
海賊たちからの評判も上々だった……



「ん…気持ちいい？…どう？」

「いいっす!!! ああナミさん…っ!!! ケツうう」

ピチッ

ピチッ

「んあ…そろそろ…挿入れる？」

「」のままっ!!! 手で!!!」

「えっ？」

ニ/2

ニ/2



「うあああっ…はう…はう…!!!」

「お尻で…イっちゃった…?」

……

「す…すいません…」

「別にいいのよ」

アッ

アッ

アッ

アッ



港町の海賊をその身体で誘い貪り食うその姿は
まさに海の魔女セイレーンそのものであった……

アッ
アッ

ズッ
ズッ

ゼッ
クッ

ナミの身体に吸い寄せられるように海賊たちは
昼夜問わず彼女を抱き続けた……



「…オイ…良いんだな？中でぶちまけても…くっ」

「いいわよ…今日は…大丈夫だから…」

「くおおお…爆乳ちゃん…出すぞ…っ!!!」

「ああっ…ちようだい…いっぱい…」

パン

パン

「くあっ…!!!あう…精子があ…漏れ…る」

「あっ…たくさん…中で…脈うってるわ…っ」

ハッ
ハッ

アッ
ッ

ゼッ

ゼッ

ク
ゼッ

「お…納まらねえ…抜かずにもう一発…いい…いくらだ…」

「サービスしてあげる…あう…」

アーロンとの勝負を決意して、ナミは何十人も海賊を相手にしてきた……

ナミの計画通り彼らの航海資金は底をつき、もはや港町に巣食うチンピラ同然となった。ス決着はついたはず！ だったのだが……



「気前いいなアンタ…」

「んっ…んぐっ」

「マジで…報酬いらねえのかよ…うお」



「やべえ…ロド…」

「んぶっ!!!ん…」

「オレも…我慢できねえっ」

ス
ス
ス

ス
ポ
ッ

グ
ッ

ム
ム

ム
ム



「おななんさおお」

「はっはっ...んざん...」

「あっ！はっ...あつたけえ...」

「はっはっ」

「はっはっ」

「はっはっ」

「はっはっ」



男なら誰でも良かった……

なかば習慣と化してしまっていた行為をすぐに止められる
はずもなくナミは男に奉仕し続けた……

ズッ
ズ



「仲間」「アローンへの憎しみ」

そんなものはどうでもよくなっていた……

「さんさん儲けやがって…っ!!!クソが!!!」

「ああああ…っ!!!もつと強く…!!!」

パッ

パッ

「ど…どうだ泥棒猫があ!!!」

「イイわ…っ!!!もつと来て!!!」



「だっ…!!!クソ…っ!!!」

「あっ…ああああ…はう…」

ジュ

ジュ

ッ
ッ

「せえ…せえ…クソ女が…」

「も…もっと犯りなさい…」



懸賞金が上がれば自分のブランド価値も高まると考えたナミは
出港を早く一行に最後の説得を行った……

一人で生きていける自信は十分あったのだが、今は妻わらの一味でいたほうが都合が良かったのであった



「……いたいわよ……私が上に……」

「我慢しろって……す……す……すぐだからよ」

「く……う……イキ……」

「ああ……でるでるでるでる……!!!」



「あっ……ちよつと……」

「ああああっ……ああっ……あ……すげえすげえ……」

「もう少し耐えてよ……イってないのよ私……」

「ひひひ……わりいわりい」

シュ

||

||

ユ

シュ

ユ

「明日には出るんだってな……」

「……ん……ぢゅ……」

「なあ……」
「こ残ってこれからもやりまくろうぜ？」

「んんん……じゅる」

「ちっ……んじや……最後に一杯くれて……やるぜ……ぐぐぐ」

ちゅ

マッルッ

ブルッ

ちゅ

「んぶう…ぶ…ぶ…」

「…の一杯で…引き締めておけよ…厳しい航海だよ…ひっひ」

ジュ

ジュ



クク

「んぶ…んぶ…んぶ…」



男たちの臭いで充滿していた
どこからか仲間の声が聞こえる……

約束の時間に間に合うよう
男たちから精液を搾り取ったナミは
部屋を後にした……

さらなる快楽を求め
ナミは今日も航海を続ける

